

記者たちが語る、被災地の現在

東北各県の新聞社では、3・11から2年が経つ今日も、震災関連報道に重点を置いた紙面作りが続けられている。新聞記者たちの声を聞いた。

〔司 会〕 **木瀬公二**（朝日新聞社盛岡総局）

〔出席者〕 **松崎俊一**（福島民報社南相馬支社長）

畠山秀樹（岩手日報社釜石支局長）

古関良行（河北新報社報道部震災取材班キャップ）

3・11の新聞社

木瀬 被災三県を拠点とする地方紙の記者、岩手日報の畠山秀樹さん、宮城・河北新報の古関良行さん、そして福島民報の松崎俊一さん、現場も社内での立場も異なる三人に、ふだん被災地以外にはなかなか届きにくい話をお聞きします。震災当日はどうしていましたか。

松崎 支社で原稿を書いています。南相馬支社は私と若い記者の二人だけ。震度六弱の激しい揺れに津波が心配になりました。管内は長い海岸線を抱えているんです。災害対策本部が立ち上がるだろうと、海岸から六キロの市役所へ向かいました。しかし電話が通じない、道路は寸断されている。浜の地区が津波で壊滅したという一報以外、何も入ってこない。じっとしていられなくて沿岸に向かい、老人ホームの救助活動を取材しました。

南相馬市では六百三十六人が亡くなりましたが、当日はまるで全体像が見えない。ましてや原発事故が起きて、南相馬が復旧作業や取材の最前線になるとは思

いもしませんでした。

畠山 地震が起きたのは本社整理部で原稿が出てくるのを待っていたときです。全電源が落ちて新聞制作ができなくなり、緊急時の相互支援協定を結ぶ青森県の東奥日報に七人の整理部員が向かいました。十二日朝、四ページの紙面を作ったわけですが、私自身は夜中に実家のある宮古市へ車を走らせました。担当する地方欄の作業がなくなっただけの状態だったので、行かせてもらったんです。市街地の河口に建つ実家は辛うじて無事。翌朝、国道四十五号沿いの家々が流されている光景を見て、「これは壊滅ではないな」と感じたのを覚えています。十一日にラジオから「陸前高田市壊滅」と流れたとき、社内は「壊滅ってどういうことだ」とざわついたんです。壊滅の二文字の意味が分かったのは、後に陸前高田市や大槌町の写真を見たときでした。

古関 僕は仙台市中心部、大通りに面する書店で雑誌を立ち読みしていました。本が激しく崩れ落ちて、「宮城県沖地震だ」と思っただけで外に飛び出すと、道路中央は車を制止して立ち尽くす人たちであふれていました。たぶん三週間前のニュージーランド地震のように

ビルが倒壊するんじゃないかという恐怖心からでしょう。常駐する宮城県警記者クラブに立ち寄ってから本社に走りました。駐車場の車のラジオから沿岸部に津波が押し寄せているというニュースが流れるのを聞いて、とんでもない事態になると思いました。

やはり新聞制作システムのサーバが倒れたので支援協定関係にある新潟日報に制作をお願いし、午後十時、仙台市内で号外を配りました。前後して午後七時ごろ、南三陸町にある志津川支局の記者から電話が入りました。避難した高台から津波の一部始終を見た。通信手段がないが惨状を伝えたい。暗闇のなか幼い息子を連れて携帯が通じる場所を探し歩いた、と。記者の口述をデスクが聞き取って十二日の社会面に掲載しました。

木瀬 僕は総局のある盛岡と沿岸部の中間地点、遠野市に駐在しています。津波被災地への救援拠点となった地です。地震は秋田県での取材中に体験し、盛岡へ戻って安否情報の号外を作りました。号外を避難所に持っていくとみんな貪るように読んでいましたよね。

古関 初めて現場に入ったのは震災七日目、南三陸町でした。取材ではなく町と交渉するためです。それまで現場から戻った記者は口々に、みんな家族や親類の